

図書館通信 —67—

1984. 3

辞書・ことばと文化

中村博保

たいていの人は、辞書とは知らない文字や事柄を教えてくれるものだと思っている。だから、一定の教育を受けたと自覚している大人たちは、辞書を引くことが恥ずかしいことだと思ふ意識がどこかに働いていて、また、辞書をひくことは少なからぬ労力の支出を伴うから、ついつい辞書に手を伸ばそうとしなくなる。

筆者が若い頃つとめていた高校に、加藤先生という英語の老教師がいた。その教師の机の上には部厚い英語の辞書が一冊だけおかれていて、先生は、暇があるといつもその辞書のページをめくっていた。ある時、生徒が、先生でも知らない単語があるのですかと尋ねたところ、にこにこ笑いながら、わたしは〈ことば〉を確かめるためにひいていると答えた。そのことが小さな噂になって、無理からぬことだという会話がしばらくささやかれた。なにしろその先生は、当時すでに90歳を過ぎていて、勤続年数の長さで有名な先生だからである。そうしたけしからん噂をしていた人間たちのなかに筆者もいたわけだが、先生の本当の偉さと、辞書をひくことの深い意味がわかるようになったのは、ずっと後になってからのことであって、今では大いに不明を恥じている。その意味の深さについてはあとで考えるとして、英語でさえそうなのだから、まして身近な自国語についてはもっと確かめて使う習慣ができてよいと思う。皆が、自分の〈ことば〉を確かめるために手軽に辞書をひくようになったら、新期採用や思考錯誤といった変な日本語にお目にかかることはなくなるだろうと思う。辞書は自分を確かめるためにある。

*

大修館の『言葉』という雑誌(昭和59年1月号)が〈辞書のたのしみ〉と題して、辞書の辞書を提供するというしゃれた特集を組んでいる。「百科事典」以下、「旅の事典」・「空想事典」・「風俗事典」・「趣味の事典」や「神話の事典」と続いていて、例えば「風俗事典」の項をみると、江戸時代の『守貞漫稿』や石井研堂の『増補改訂明治事物起源』が列挙されている。この「風俗事典」を含めて、事典類の種類豊富さに改めて感心させられたと同時に、そこに〈文化〉の布置図を見せられたようでおもしろかったが、またこの企画の狙いも、そこいらあたりにあったのではないかと思われるが、なぜこれほどまで事典類の刊行が盛んなのかと考えさせられた。それが情報化社会の特徴だといえよそのとおりだと思うが、それだけでは、わかっ

もくじ

特集

- 大学生活と図書館…………… 3
 - 武田昌代(人文・4年)
 - 和田達明(工学・3年)
 - 中尾欣司(教育・院・2年)
 - 藤原玄一(工学・3年)
 - 石川靖乃(人文・4年)
 - 山田勝也(理学・2年)

〈私のすすめたい本〉

- 科学文明に未来はあるか
(荒川 紘)…………… 6
- 「古典」はもはや死語?
(高橋洋児)…………… 7

- 教官寄贈図書…………… 8
- お知らせ…………… 8



- 新生生のための図書館利用案内のお知らせは次ページに

たようで少しもわかったことにはならない。〈文化〉が複雑になればなるほど、きっと〈文化〉自体のなかに、みずからの〈文化〉を統合する自己検証の力が自然に働いていて、自分の索引をつくる力となって作用する、そんなことを考えた。また、そのような〈文化〉の自己検索の構造が、それ自体として形をとった存在が図書館ではないかとも考えた。そう考えると、人類の〈知〉の発生とともに図書館がつくられた事情もわかるような気がした。もちろん、人類の〈知〉の体系も、個人をこえてあるわけではない。〈知〉も〈文化〉も、個人のうちにあって、はじめて体系として存在する。体系とは本来そういうものだと思う。誰でも知らないことがあるから事典をひく。そのとおりでと思うが、しかし同時に、新しく知った知識を位置づけることによって、自分の属する〈文化〉を確かめようとする気持ちが、必ずどこかに働いていると思う。

*

同じことは、国語辞典や英語の辞書についてもいえると思う。辞書の価値はたしかに使いやすさにある。その意味で実用性が生命であるに違いないが、しかしそれだけではない。大槻文彦は、明治24年に『言海』を出したあと、没するまでの30余年を『大言海』の完成に費しているし、新村出も、一度出した簡便な『辞苑』から出発して『広辞苑』を編さんしている。この二人を支えていた

ものは、自国の〈文化〉の全容を国民に知らしめんとする情熱であった。あるいは〈ことば〉のうちに自国の文化を映し出させ、確かめさせようとするねがいであったと思う。

〈ことば〉は、直接ものを産みだすことはないし、病気を治せるわけでもない。しかし〈ことば〉を伴わない知識はないし、〈ことば〉によってつくられない意思はない。その意味では、ものをつくりだすのも、病気を治すのも〈ことば〉であるといっている。同じように、法律をつくるのも〈ことば〉であるし、美術も音楽も〈ことば〉によってつくられている。われわれの社会は、実は〈ことば〉によってつくられ、動かされているのである。歴史をつくるのも〈ことば〉であるし、その歴史を歴史として後世に伝えるのも〈ことば〉である。万葉びとのよろこびや悲しみを今日に伝えているのも〈ことば〉であるし、そうした〈ことば〉(文学)を、中学生にわかりやすく教えるのも〈ことば〉である。〈ことば〉はそれ自体が〈文化〉のエッセンスであると同時に、実用の道具であり、〈文化〉の深部を知る索引でもある。

加藤先生は、理解のない生徒や教師にかこまれながら辞書のページをめくり、それまで親しんできた英語の単語のひとつひとつを眺めながら、その〈ことば〉の背後にひろがる異国の〈文化〉の姿をみて楽しんでいたのだと思う。

(教育学部・国文学)

新入生のための図書館利用案内のお知らせ

ライブラリー・オリエンテーション

Library Orientation

期 間： 4月16日(月)～4月20日(金)

第1部： 図書館および資料の案内と利用法の説明 (ビデオによる繰り返し放映)

時 間： 午前10:00～午後4:00 (除く12:00～13:00)

所要時間： 1回15分

場 所： 喫煙コーナー (4階閲覧室入口右側)

第2部： 書庫内案内

時 間： 第1回 午後1:30～ 第2回 午後3:30～

所要時間： 毎回15～20分

集合場所： 喫煙コーナー (4階閲覧室入口右側)

大学生生活と図書館

「IN THE POCKET」

私の「大学生生活と図書館」

和田 達 明

武 田 昌 代

私の大学生生活もあとわずかとなった。期待、不安、戸惑い、そんなものが入り混じった複雑な気持ちで、広いキャンパスを歩いていた日から、4年も過ぎたわけである。「光陰矢の如し」だと思づくと思う。20歳前後の貴重な時を過ごした日々、楽しかったこと、悲しかったことを織りまぜて思い返し、そっと暖めてみたい気がする。

その4年間の総決算である卒業論文で、私は江戸時代の俳人「橘以南」を取り上げた。心優しいお坊さんとして知られている「良寛さん」の父親であるが、残念ながら現在はほとんど知られていない。入婿後、名主職を継ぐのだが、世事を嫌い次第に風流韻事にひたった生活を送るようになり、やがて桂川に身を投げ一生を終えた、という人物である。彼が生前いったいどのくらい句を作ったのかわからないが、現在残っているものは少なく、それを入手するのにさえも苦労した。その句や以南に関する資料を集めるに当たり、図書館には大変お世話になった。図書館のピーンと張りつめたような雰囲気は好きだったが、不勉強な私は、それまでレファレンスを利用したことがなかったのである。しかし、私のさまざまな相談、無理な依頼にも快く応じて下さり、おかげで卒業論文も何とか書き終えることができ、心から感謝している。

キャンパスを吹く風はまだまだ冷たいけれど、まもなく萌え出す木々の下をいつかの私のような学生が頼りなげに歩くことだろう。そんな彼らが図書館に親しんでくれることを願う。図書館は、こちらが求めれば、それなりに、いやそれ以上に応えてくれる所である。卒業論文を終え、実感としてそう思う。

耐震工事をほぼ終えたらしい図書館は、外観も生まれ変わって一段と風格を増したようである。しかし、閲覧室から海が見ることができなくなってしまった。安全上やむを得ないことなのだが、日によって時間によって変化する海の表情を眺め

(右へつづく)

今回、「図書館を利用して」というテーマで何か書いて欲しいと依頼されたが、はっきり言って何を書いていいのかわからずに当惑しているうちに原稿の締切期限が明日に迫り、こうしてあわてて筆を走らせている次第である。簡単に自分なりの図書館の利用法と感想を述べさせてもらう事にしたいと思う。

わりと小さい頃から本がずらりと並んでいる所が好きだった為か、大きくなったら書斎のある家に住んでみたいと、今思うとわりと贅沢な夢を抱いていた為か、今年度工学部に移行して図書館の事務補佐員になって、図書館を利用する機会が増した事は非常に嬉しく思っている。

広々とした部屋でゆっくりと本を読むのは格別である。特に新館の2階などは落ち着いた雰囲気、そこで半日中ゆっくりと好きな本を片手にもってコーヒーの香りを漂わせていたらどんなにいいものかと常々思っているのだが……

実際そんな暇など全くない今日このごろではあるが、それでも図書館の事務補佐員として受付に座っていると、まるでこの図書館全体が自分のものであるかのような気がしてくる。あたかも小さい子のポケットの中の物のように完全に1人で所有しているような感じである。こんな風に考えて図書館を利用するのも1つの方法だと思う。もうここへ来たら自分の家だと思って気軽にこの図書館を利用していくべきであると思う。またその為の図書館であるのだから……。

たまには実験・研究・レポート等で必要な本を探しにくるばかりではなく、好きな本を見つけてゆっくりと読んでいくのも良いと思う。大いに図書館を利用し、自分のポケットの中に入れてしまおうではないか。(図書館の本をポケットに入れて持ち出す事などしないように……。)

(工学部・電子工学科3年)

るのが、私の秘かな楽しみであっただけに残念ではない。4年間の思い出が一足早い東風に吹かれてとんでいくようだ。

(人文学部・人文学科4年)

図書館雑記

中尾欣司

6年の長きにわたった学生生活が終わりに近づいている。大学の附属図書館にお世話になるのも後わずかになった。

院生には図書利用の「特権」がある。一般貸し出しは5冊まで1カ月、論文・演習用も5冊以内で3週間、合計10冊借り出せる。専門書が高価な昨今、書籍代もばかにならない。手元に置きたい本をすべて買い揃えていたらきりが無い。私は近現代史を学んでいるが、歴史研究に必要な基礎的文献である、いわゆる“工具類”まで借り出さなければならない。10冊の貸し出しは貴重である。

この10冊の本を運ぶのがまた一苦勞である。私は富士の自宅から通っているが、本をバックに詰め、バスと電車を乗り継いで帰る。学究より、むしろ肉体労働に向いていると自他共に認めている私でさえ、肩に食い込む重さには閉口する。以前にはよく車を利用してしたが、交通規制が厳しくなった現在、容易に学内に入れてもらえない。

図書館といえば、県立図書館を利用する学生が多い。蔵書の多くが、開架式になっていて便利で、自由に文献を捜し出せる。ただ、貸し出しは3冊までで2週間以内、しかも継続できないので、困る場合が多い。私の友人などは頻繁に利用しているが、彼等の目的はむしろ隣接する女子大学の利用者らしい。

変わった図書館では「大宅壮一文庫」がある。故大宅氏の蔵書、資料を基にした文庫で、雑誌を調べるには利用価値が高い。「大宅方式」とでもいうべき独得の分類方法を用いた索引が便利である。大別して、人名と件名の索引があり、雑誌・書籍に掲載された記事が個人、事項別に細かく分類されている。20冊まで一度に閲覧できる。国会図書館のあの混雑、待ち時間の長さが嫌な人にはお勧めできる。但し、コピーは一部120円と高いので気楽に頼めない。

図書館は私達の書庫である。欲しい文献をすぐに取り出すというわけにはいかないが、膨大な量の本がある。大学院の修了と共に私は書籍の一つを失うことになる。寂しいかぎりだ。

(大学院・教育学研究科2年)

図書館にて

藤原玄一

冬の暖かい光をいっぱいを受けた席に腰掛けて、何となく館内を見回してみると、まばらに席が埋まっています。そこにある顔は、ここではよく見かける顔で、お互いに話をしたことはないのですが、僕にとってはなじみの顔です。

どうも図書館を利用する人というのは決まっているようです。図書館に来ない人というのは、何故、来ないのでしょうか。或る時期になると急に図書館へ通い出す人もいますが、どんなことがあっても決して足を向けぬ人も大分いるようです。この文は、そういう人達を思い浮かべて書いています。

本の数と種類がまだまだ少ないというのは、確かにそうでしょうが、そんなことは利用者が増えればに解決して行くことです。それに、幾ら本数が少ないと言っても、この辺にある他の図書館に比べれば、ずっと揃っているはずで

でも、図書館の実効的な面ばかり考えて図書館を使う必要はないと思うのですが。同世代の人間が、同世代の人間に対してこんなことを言うのはちょっとおかしいのですが、それに僕自身も嫌なのですが、学生のうちは色々な本に接しておいた方がいいと思うのです。別に、視野が広がるとか、偏狭性を無くすとか、そんな意味ではありません。《自分》とは違う、全然別個の精神に触れてみようとする事自体が、我々若者のエネルギーの現れだとも考えられませんか。

何となく図書館に来てみても結構面白いです。書棚の間で、また何となく本を探していると、はっとするような文章が見つかったり、そばで同じことをしている人に変な競争心を感じたり。それから部屋のずっと隅に行って館内を一望すると、空間と人との関係が見えて来たりするのです。人と人との間に作る空間に何か決まりがあるんです。また、どの辺に座るかで、そこに座ってる人間の性格が解かったりしまして。

とにかく一度図書館に来て、自分で自分なりの図書館の面白さを発見してみてください。

僕も、愚かな見物はこの辺でおしまいにしましょう。(工学部・電子工学科3年)

“図書館へ行く”

石川 靖 乃

私達大学生にとって、「図書館へ行く」ということはいったい何をすることなのだろうか。それは恐らく、ただ読書をするだけとか、受験勉強をするということではないと思う。

私達が主として利用する大学図書館の機能として、(1)学生の学習と教養のためのサービス機関、(2)学内における研究調査のためのサービス機関、ということが挙げられる。つまりこれは、大学生にとって大学図書館というものは、研究、調査を通じての自己教育の場であるということの意味していると思う。このことからして、大学生が「図書館へ行く」ということは、「図書館で得られる情報を駆使して、自発的な態度で研究、調査し、自らの教養を深める」ということを示していると考えてもよいだろう。

しかし、これは容易なことではない。まず第一に図書館の利用方法を習得しなければならない。それだけでなく、必要な情報を見出すことはできない。そして、その利用方法を習得するためには何回も図書館へ足を運ばなければならないと思う。そのうちにはきっと、上手な利用方法を見つけることができるだろうし、意外な本と出会うかもしれない。なによりもまず、何度となく「図書館の建物それ自体に行く」ことが大切なのである。

静大図書館についてどう思うかとたずねると、十中八九、「本が少ない」、「資料が少ない」という答えが返ってくる。しかし、いったいこのうちの何人が、静大図書館にかよいつめて、館内をくまなく探し、情報を得るためのあらゆる手段をつくしたうえで、そのように答えているのだろうか。本がないと決めつけて、ろくに近寄りさえしないものもなかにはいるのではないだろうか。実際、静大図書館は大学図書館としては不十分なものであるかもしれないが、私達をもっともっと利用すべきである。利用者が少なければ、図書館に対する不満は盛り上がらないし、いつまでたっても、私達が求めるような充実した内容の図書館にはならないと思う。「図書館へ行き」そこで過ごす時間をもっと増やすことが、今、静大生にとって必要なことの一つだろう。

(人文学部・人文学科4年)

開館時間延長に思う

山田 勝 也

静大の図書館は数年前までは五時までしか利用できなかった。又、これは現在でもそうだが、土曜午後と日祝日は閉館である。試験期間中だけはたしか七時半頃まで延長されたが、8時限目の終了時刻が五時十分であるわけだから、いきおい足が遠のいたとしてもいたしかたないことであった。

当時、駅北の下宿にいた小生は夕食を安くあがる生協食堂などで済ませたかったが、その為には食事時間の六時頃まで何とかして大学近辺に残っていなければならない。五時前には図書館を追い出されるし教養部の教室はカギをかけられて、やむなくA棟0階で本を読んだりしていたが、見回りのお兄さんに無許可としかられたこともあった。

昔話をむしかえすようで多少気がひけるが、何がしかの参考になるかも知れないので述べると、当時の自治会は開館時間延長を公約にかかっていたが、いくつかの理由で不可能とのことだった。その1。当時、学生の図書館利用状況はまことに少なく、これほど勉強しない学生の為に延長しても経費の無駄。その2。職員の負担が重くなる。その3。こういった問題は簡単に決まるものではなく、果ては文部省が云々説、いわんや1自治会の力ではどうにもならない等々。小生は学長が入学の挨拶で、諸君の勉学の意欲に十分応え得るものだと思うと静大を誇った言葉をひそかにうらんだりしたのだった。

それがある時、突然現状の8時45分閉館となった。何でもアメリカの大学図書館を視察してきた図書館長のかけ声で、アルバイトを使って延長するという現在の方式になったとのことだった。職員の方々にはお気の毒だが、学生の一人として館長の英断にどんなに喝采をおくったことか。

最近では多くの静大生が有効に図書館を利用している様で、当時を思うと感慨深いものもあるが、何はともあれ学生にとって開館時間延長ほどありがたい事はない。古今の書籍をのんびり眺めるもよし、又、うるさい下宿を逃れて勉強することもできる。こうなれば日祝日もぜひ開館して知恵の府として大学の面目をほどこしていただきたいと考えるのは小生だけであろうか。

(理学部・化学科2年)

〈私のすすめたい本・49〉

野坂昭如編著

『科学文明に未来はあるか』

荒川 紘

私は昨年4月に赴任、東京から大谷の宿舎に転居した。

気候の良さについては以前から耳にしていたが、実際に移り住んでみて、それよりも、タヌキも出没するという自然に恵まれたキャンパス、とくに起伏に富んだ地形はなににもまして嬉しかった。散歩やジョギングに格好の場所である。数年来肥満気味で、医者から減量のための運動を強く推められていたから、これで寿命は少しは伸びると考えられたのである。

しかし、今となっては、この起伏の豊かさが恨めしい。宿舎の前を飛ばすバイク、オートバイ、乗用車の騒音。私の部屋の前が坂の登り口になっているので、そこでエンジンをふかすのであろう、他の棟にくらべてもひどいようだ。それに坂道が多いために車の利用者が多いのであろうか。散歩やジョギングで伸びた分以上に、私の寿命は縮められている。

まあ、そのうち騒音には慣れてくるのかもしれない。かつては高速道路のすぐ側に住んでいた私である。だが、この騒音以上に私を憂うつにさせているのは、大学の内外で頻発する車の事故である。昨年夏、私の研究室の近くで乗用車同志の衝突事故があったが、10月には、日本平をオートバイで飛ばしていた学生が対向車と激突、即死、最近では、一家の柱であった2人を撥ね死亡させるという事故が起きた。夏休中瀕死の重傷を負った学生はどうなったのか。たしかに車は距離を大幅に縮めてくれたが、人間の寿命もまた縮めているのである。

私は、キャンパス内への車の乗り入れには大反対であるし、そもそも学生が車をもつことにも大いに疑問を感じている。坂道が多いというのが車をもつ理由であるならば、足腰のもっと丈夫な学生を入学させるようにしたらよい。2次試験に体力テストを加えるのもひとつの方法である。最も高い場所にある人文学部の場合、その比重が最も大きいのはいうまでもない(もちろん、教職員の採用や停年制にもひと工夫が必要となろう)。最近図書館を利用する学生が少ないということだが、それは、多くの階段を昇り降りしなければならない

図書館の配置と構造にも一因があろう。足腰に自信のある学生が多くなれば、利用者の数も増えるかもしれないし、案外、それによって個性的な大学に生まれ変わらないともかぎらない、と私はまじめに考えるようになっている。

ふだんの恨みもあって、車ばかりを目の敵にすることになったが、現代の科学の成果は、一般的にいつて車同様、高性能な凶器の開発の「成果」でもあった。得体の知りにくい、物騒な科学的凶器が陸続と生み出されている時代である。一例をあげれば、昨年西ドイツに配備の決ったアメリカのミサイル、パーシングII。あらかじめ敵の目標の画像をコンピュータに記憶させ、それによって目標を捜しあて、命中させる最新の兵器である。今日の花形技術、電子・情報工学の最高・最悪の「成果」であろう。近いうち、顔写真から犯人を自動的に捜し出す機械が開発されるのではないかと思われるほど、電子・情報工学の進歩はめざましい。

科学とは一体何なのか——恨みを科学の発達にむけてはみても、この私自身が現代の科学・技術にどっぷりと漬っているのである。どう弁明しようと、私の専攻科学史だって、科学・技術の時代だからこそ飯の種になるというものだ。私だって電卓ぐらいは使うし、数日後には、バイクとは比較にならない騒音源である新幹線で上京するはずである。

そうではあっても、われわれはやはり科学の意味を問いつづけるしかない。表題の本『科学文明に未来はあるか』(岩波新書)のなかで、編著者である野坂昭如も、そのようなジレンマに苦しみながらも、なお、科学の将来をさぐり、「日本がそこそこまあまあ生きていける方策を若者が自主的に見つける」ためのきっかけをなんとか与えようと努めている。原子力、コンピュータ、遺伝子工学といった先端技術、自然保護や老いと死の問題など話題は多岐にわたるが「素人」を自認する野坂と各分野の専門家の対談の形式をとり、親切な専門用語の解説もついているので、共通一次試験に挑戦した学生ならば床のなかでも楽に読めるはずである。

バイクを求めようとしている学生にはとくに推めたい。たった430円。生協なら390円で買える。むろん図書館にもある。(教養部・科学史)

「古典」はもはや死語？

高橋 洋児

時代状況の現在は、ざっと見渡すところ一体どんな局面にあるのだろうか。そして、現代文明の行く末は？——これは万人に利害関係のあることからだとはいえ、仲々厄介な問ではある。「現在は資本主義発展の〇〇段階にある」といった紋切り型では、もはやとうてい間に合いそうもない。

大きな変化・変動が人間生活の種々層にわたって生じている。だから、時代状況の認識も人間生活の種々層にわたるものでなければならない。ジグゾー・パズルにも似て、「現代」という画像を描き出すには多くのピースを必要とするのである。

そんな中で本の一冊や二冊すすめたところで……などと思いはじめると、本をすすめる前に気がすすまなくなるから困ったものだ。こういうのをネクラというのだろうか。授業関係の参考文献を挙げるのならお安い御用だが、教室外で今の学生諸君に本をすすめるとなると、ためらいが先に立つ。手近な現代文明論もの、たとえばA・トプラー『第三の波』や西部邁『大衆への反逆』などを（特に、歴史展開の動力をどんなふうにか押さえているか、押えていないかに着目して）批判的に吟味してみても、とすすめる程度でお茶をにごしたいところだ。

かつての教養主義盛んなりし頃なら、「古典」をすすめておけば事足りたであろう。すすめられる側にも、すすめを受け容れる用意があって、双方のあいだには幸福な一致が見られた。だが、今は？ 世代間の読書比較は、「古典」とはいったい何だろうかという疑問を提起せずにはおかない。

たとえば外国文学の古典といえば、私などにはあの朱色の表紙の筑摩版「世界文学大系」が印象のこっている。西洋思想関係では、ひと昔前なら河出の「世界大思想全集」が、近年のものでは中公の「世界の名著」あたりが代表的なものだろう。これらは「古典」の集成にほかならないが、はたして今の諸君に「古典」の概念はあるのだろうか。むしろ、「古典」を茶化したりパロディ化したりするやり口がナウイとされるような風潮も一部にはあるようだが。「軽薄派」が「古典」を見くだすの図!?

といっても、私自身は別段、「古典」の価値は万古不易なりとする古典主義者であるつもりはない。「古典」の価値も、それこそ“弁証法的に”変転するものであろう。いくら変転を超えて生き続

けるのが「古典」だといっても——。パラダイム論次元のこととしていえば、古典と通俗、高級と低级、ホンモノとニセモノ、正統と異端といった二分法ないし二項対立図式そのものが今日、抜本的再検討にさらされているのもうなずける。〈神〉に意味を見いだすのもホンダの「シティ」に意味を見いだすのも基本的には同じこと、といった“過激な”説も飛び出すご時世だ。せめて、ヒエラルヒー（階層秩序）が到る所で崩壊しつつあるという現実くらいは、しかと見据えたいものである。

だが、よしんば「古典」の概念がもはやくずれていったのだとしても、そのことは本を読んでじっくり考えることをしないでよいという免除理由にはなるまい。「近頃の学生はロクに本も……」などと慨嘆されるのは、先人の英知に学びつつ自分の頭でデンケンして活路を切り拓いてゆく必要に迫られるほどの〈問題〉にぶつかることがないからなのだろうか。それとも、「問題にぶつかると」と深刻ぶること自体、グサイことなのだろうか。もちろん、いろいろな考え方、生き方があってよい。しかし、たとえば現代ヤングの折角の「やさしさ」や「思いやり」も時に大変もろくて薄っぺらなように見えるのは、どうしたことか。それらの反対物（不親切、エゴ、みにくさ、おぞましき等々）との押し合いへし合いのなかで錬成されたものではないからなのか。自分の好みやフィーリングに合わない異質なものととの交わり・かかわりあいを最初から避けているところには、たしかに〈問題〉が生じることもない。まさに、“シンプル・ライフ”万歳、というところである。

しかし、もちろん現実にはシンプルではありえない。ありとあらゆる押し合いへし合いに満ちみちている。いろんな〈問題〉が、助けてくれと呻いている。（法経短期大学部・経済原論）

■教職員著作寄贈図書

＜本館＞

荒川 紘 (教養部)

『日時計=最古の科学装置』(MONAD BOOKS 15)

荒川 紘著 海鳴社 1983 (449.1/A63)

仁平道明 (教養部)

『類聚本系江談抄注解』江談抄研究会編 (注解=仁平道明)

武蔵野書店 1983 (913.38/O18g 開架)

田村貞雄 (教養部)

『山口県自由民権運動史料集』 田村貞雄編

マツノ書店 1983 (312.1/Ta82)

黒羽清隆 (教育学部)

『写真記録 日本の侵略：中国・朝鮮』黒羽清隆・梶村秀樹解説 ほるぷ出版 1983(210.7/Ku72)

『日本史への招待 何をどう見るべきか』

(グリーン・ブックス5)黒羽清隆著 大和出版 1983 (1974) (S210.7/Ku72)

『見つめられてこそ人は生きられる 自分を生きるためのノート』黒羽清隆著 大和出版 1983 (159.7/Ku72)

『日中戦争前史』(三省堂選書100) 黒羽清隆著 三省堂 1983 (210.73/Ku72)

五井直弘 (人文学部)

『中国古代の城 中国に古代城跡を訪ねて』(研文選書17 五井直弘著 研文出版 1983(522.2/G58)

坂本重雄 (人文学部)

『公務員の社会保障 一その法構造と機能一』坂本重雄著 勁草書房 1983 (317.34/Sa32)

小嶋睦雄 (農学部)

『新興林業地域と地方木材消費地市場の結合と再編』小嶋睦雄著 静岡県林業会議所 1983 (650.215/K039)

阿部圭一 (工学部)

『ソフトウェア入門』 阿部圭一著 共立出版 1983 (535.5/A12)

＜浜松分館＞

阿部圭一 (工学部)

『ソフトウェア入門』 阿部圭一著 共立出版 1983 (549.92/1183)

本郷廣平 (工学部)

『電波工学の基礎』 本郷廣平著 実教出版(株) 1983 (548/12)

■図書館委員会報告

昭和58年度 第4回 S 58.12.12

議事

- 1 昭和59年度指定図書実施方針について、審議し、原案どおり承認した。
- 2 昭和58年度外国雑誌購入費の配分について、審議し、原案どおり承認した。
- 3 昭和58年度学生用図書購入費の配分について、審議し、原案どおり承認した。
- 4 昭和59年度大型コレクション収書計画について、2月末迄に各部局等から提出願ひ、要求分についての調整を3月に行う手はずとし、準備願うこととした。
- 5 その他
 - (1) 本学の附属図書館整理課に1月1日付で、図書館専門員が1名配置される予定である旨、説明がありました。
 - (2) ネブラスカ大学オマハ校との交流について、本学との資料交換の希望があり、館内にオマハ校のコーナーを設けることと、当面入手できる資料を送付するため、各部局からも関係資料を寄せられたい旨、説明があった。
 - (3) 図書館業務電算化委員会の実施報告、その他学術情報システム関係について、説明があった。

お知らせ (本館)

◎春期休業中の長期貸出

貸出冊数：5冊

貸出開始：昭和59年2月22日から

返却期限：昭和59年4月16日まで

なお：卒業見込者及び工学部3年進級見込者には長期貸出はいたしません。

◎臨時休館

昭和59年3月5日(月)～3月6日(火)

昭和59年3月21日(水)～4月7日(土)

■人事移動 (本館)

昇任 (昭和59年1月1日付)

下村一夫 整理係長→図書館専門員

島村敏子 運用係員→整理係長